

裴鏡民碑・選字16字



裴はい
鏡きょう
民みん
碑ひ

637年
(唐・貞觀十一年)

古典碑帖の窓⑨

木 雞

木雞室
伊藤 滋

「裴鏡民碑」の筆者・殷令名は、初唐の三大家の中には入れられていないが、同時代の人物である。「裴鏡民碑」は、歐陽詢の「九成宮醴泉銘」とほぼ同じ頃に書かれた。近年刊行の書道史の本で、初唐時代の書として取り上げられていないものがある。しかし図版に示した文字を見てください。碑文は破損が多いですが、保存のいい文字もあり、その書風は、初唐の三大家に並ぶものです。力強く重厚な筆画は、歐陽詢のようです。また落着いた伸びやかで、中に力を秘めたような筆勢は、虞世南の「孔子廟堂碑」のようです。また安定し、きりっと引き締まった字画は、褚遂良の「伊闕佛龕碑」の趣です。横画の中央部分で点画を引き絞る処などの筆法は、「雁塔聖教序碑」と共通するものです。宋時代の人が指摘しているように、三大家の書風を全て含んだような書風です。実に品格のある書です。虞世南の「孔子廟堂碑」を学ぶには、この「裴鏡民碑」の品格のある筆勢を土台にしてから臨むのも一つの方法かもしれません。



「孔子廟堂碑」



「伊闕佛龕碑」



「雁塔聖教序碑」

江漢英靈多慙光
價祖靖慮魏銀青
光祿大夫汾州刺
史銀章青綬登

書道芸術院 平成の書 (2009)

〈鑑真像の眼窪〉



四季の抒情 辻元大雲書展出品作

182 × 242 cm



辻元大雲

財団法人書道芸術院

常務理事

現代に生きる言葉を書に

2009年は私にとり生涯最大の節目となる年であった。年初2月の東京セントラル美術館での「四季の抒情」と銘打って開催させて頂いた個展は、今振り返ってみてこれまでの書に関わった人生に大きな飛躍台を与えて頂いたものとなった。

契機となったのは本院恩地春洋理事長から強い力で背中を押されたことである。いろいろな意味でこれ以上ないタイミングでの発表の場を与えてくださったことの重さをひしひしと感じていた。しかし発表の内容は自身で考えるしかない。あえて日本の詩歌、田宮文平先生曰く「国文の書」のみにこだわり、これも四季という日本の風土に

焦点をあてて会場構成、設計から入った。古来の詩歌は枕草子第一段はじめ、芭蕉、一茶、童謡、唱歌と、春夏秋冬をテーマに好き勝手に選んだ。ポイントには現在の詩歌であった。大滝貞一氏の短歌、片山由美子氏の俳句

は四季で、吉田加南子氏の詩は象徴的な新作詩で、前回(2002年10月開催)の個展と同様、共同作業としてご協力をお願いし、文字者とのコラボレーションを試みた。ご協力を依頼した先

生方にはご無理をお願いすることとなったが、今回最大の柱を「現代に生きる言葉を書くこと」をテーマとした私の想いを実現させるためには、どうしても越えなければならぬハードルであった。

結果はどうであれ、思いの丈をほぼ実現できた充足感を味あわせて頂いた。その後の毎日書道顕彰の栄に浴したことは正に望外の幸であった。皆様への感謝あるのみである。

掲載の作は個展に発表させて頂いた中から、大滝貞一氏の短歌「鑑真像の眼窪」を。羊毫長鋒と木筆の二本組みで大字部分を、羊毫中長鋒で歌本体を揮毫した。大小の文字群の組み合わせにより変化と広がりを狙っている。

書のひろば

理事長 恩地春洋

全国学生書道展

62回展は奈良県文化会館

63回展は仙台メディアテーク

左記のように書道芸術院の理事評議員会が行われた。

日時 11月23日(院の創立記念日)

場所 上野精養軒

小春日に恵まれ、院の創立記念日。

平成22・23年度の東京都美術館改修に伴う、第62回全国学生書道展、第64回65回書道芸術院展への影響が話しあわれ、その変更した行事が決定された。

1、第62回全国学生書道展

会期 平成22年7月28日～8月1日

会場 奈良県文化会館(関西総局担当)

作品締切 6月8日

審査は東京、担当 種谷萬城

※第63回展は、東北総局担当で、会場は仙台メディアテークを予定

2、第64回書道芸術院展

審査 平成22年12月11日(一般・無鑑査)

平成22年12月12日 審候作品

平成22年12月13日 審 作品

※審・審候とも未表装のまま審査

会場(三会場で分散展示) 開催順

(1)中央展

会期 平成23年2月1日～6日

会場 東京セントラル美術館

出品 財団役員、常任総務、総務

峰雲賞、同候補、大賞、白雪紅梅賞(約300点)

2月5日 表彰式、研究会、祝賀会

祝賀会

(2)西日本展(関西総局長 小林琴水)

会期 平成23年2月22日～27日

会場 奈良県文化会館

出品 財団役員、常任総務、総務

峰雲賞、白雪紅梅賞(約60点)

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

祝賀会

九州展

◇運営委員

漢字部

小原道成 高橋静豪 谷川玉峰

千葉軒岳 中西東李 西 墨濤

堀 吉光 水川舟芳 山田太虚

渡辺會山

かな部

荒井青莊 酒井美春 坂本秀翠

下谷洋子 千葉和子

近代詩文書

井之上南岳 北野攝山 坂本素雪

鈴木不倒 武田竹影 西野象山

福田鷺峰

大字書部

小林琴水 村松太子 柳 碧籬

山中翠谷 渡辺洋一

篆刻部

稲村龍谷 笠井雋堂

刻字部

安藤豊都 薄田東仙

前衛書部

千葉蒼玄 中西浩陽 長沼透石

原 雲涯

島田無響 松本暎子 森本妙子

水谷春晶 満岡敬柔 川合義山

小伏竹村 笹野舟橋 出口恵山

村野大仙

△参与会員▽

渡辺東龍 根岸鷺山 植竹湘英

大越敬桃 富岳凌雲 黒田玄夏

平田鳥閑 志津和子 酒井真沙

青島貴扇 伊豆田雪岳

飯島 春美

石飛 博光

鬼頭 墨峻

中村 雲龍

山田 太虚

荒金 大琳

3、会場当番など地区委員の日

当は含まない。

4、開会式、祝賀会の開催等は各地区一任。運営費は独立採算、院の補助なし。

3、第65回記念書道芸術院展

三会場で、ほぼ64回展に準ずる。

石川忠久先生の「対句のおもしろさ」

創立記念日、恒例の記念講演は二百名に近い会員が参加して、石川忠久先生の「対句のおもしろさ」について、詩人の紹介話などを交じえ、聞く者を酔わせて楽しい一時間半であった。

第62回毎日書道展の人事

一名誉会員に

小伏竹村、村野大仙さん

院から三人実行委員長

◇主要役員

実行委員長 飯島 春美

審査部長 石飛 博光

総務部長 鬼頭 墨峻

陳列部長 中村 雲龍

◇各展実行委員長

北海道展 山田 太虚

東北山形展 渡辺 大洲

東北仙台展 浜田 堂光

北陸展 石井 駿

東海展 安藤 豊都

関西展 砂本 杏花

中国展 相原 雨雪

四国展 大野 祥雲

九州展

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

荒金 大琳

前衛書 (三)

千葉 蒼 玄

他の部門から見ると、前衛書と臨書はどこで繋がっているのかと思う人も多いのではないだろうか。確かに前衛書の中には文字を使わずに制作している作家も多い(文字を使わないということは現在の文字造形以外の新しい「形」を見つけ出すことにあるのであるが)ので臨書との関連を考えにくい。

しかし、書の基本となる「線」という考え方からすると、古典から得る線表現の技術は多い。絵画で言うところのデッサンが是にあたる。古典それぞれの特徴を列記してみると、雖で突き刺したような甲骨文、一本の線に抑揚



千葉蒼玄書

のある隷書、ブロックを積み重ねたような造像記、丸太のように柔らかみと重厚さを兼ね備えた顔法、太い縄から糸のように細い線までを变幻自在に表現する草書。それぞれに多様な表現が習得できる。この線のパリエーションを修練することが臨書であると考える前衛作家は多い。

私の場合は、たとえば造像記の側筆の荒々しさと顔法の重厚さを兼ね備えた作品などを古典の中から組み合わせることにより新しい表現が生まれないかと試行することもある。掲載のものは前回の社中展に創作的臨書として、良寛の細楷と良寛のかな(和歌)を一つの作品として融合させたものである。部分的には何度

も臨書を重ねたものであるが、一つの作品として仕上げる場合、筆、紙、大きさが違えば当然リズム造形も違うものになる。明清の大家、王

鐸は一日臨書、一日創作といったそうであるが、王羲之の手紙文を臨書したものなどは本文が行書であるにもかかわらず、草書で自由に連綿している。王鐸にとって見れば臨書も創作も同一だったのではないだろうか。

21世紀の書

—私の主張—

漢字 (三)

前田 龍 雲

最近、比較的好きな篆隸楷書の古典、または、あまり崩されていない行書の古典などを強い線質重視で書くよう心掛け、なおかつ、次の画、次の画へと気持ち繋がりが、流れを出せるように臨書しています。

そして、いかに形を誤魔化さず、正確に書くかを考えています。点画がバラバラのようでも繋がりがあり、書けば書くほど

見えてくるようで、その面白さにもハマっています。

一文字の、ある程度納得した臨書が書けると次の文字に移ります。その際に、次の文字への繋がりを意識します。これも、一見バラバラに見えるものが、上の文字を受けけるように書かれているのが見えてきます。この繰り返しで多字数の臨書を進めていくわけです。もちろん作品制作の参考にならないかも念頭に置いています。

このところ、自分の作品がマンネリ化してきたように思います。臨書から新たなヒントが見つからないか探っています。行き詰ったときに「原点に立ち返れ」とはよく言われることですが、自分の中で基礎に立ち返っているところですか。



前田龍雲書

二〇〇九年第19回関西代表作家展出品

研究会誕生と私

菊池 千喜

(現代詩文書部・審査会員)

昭和63年9月、現「伊呂波書の会」会長、坂本素雪先生を中心に「現況に安住せず、たえず新しいものを追求したい」という考えを同じくする者同志6名で、伊呂波書の会が結成されました。

月二回の練習日は、まるで憑かれたかのように書きまくり、お茶の時間の談笑も得難いものでした。

平成2年「第一回伊呂波書作展」の話がもちあがり、この頃私の弟、高橋嘿峰（高校教諭、加藤光峰先生主宰の亀甲会に所属）も入会し、うれしく心強いものでした。

初めての書展開催ということで、会場・日時・作品点数・案内状等の企画は大変でしたが、素雪会長、弟・嘿峰の経験が大いに役に立ち、全員一致団結しての行動は実に楽しいものでした。

書展の足跡として記録を残そうと作品集も作ることにし、その編集の大変さも初めて経験したことでした。

「流れる水は生きている」常に新

しい分野に挑みながら、その旺盛な探究態度に心から拍手を送るものである。

よきリーダーのもとに、会員精鋭七人の燃えたぎる追求への意欲に敬意を表する」と、前・宮城野書人会会長・小野寺達仙先生には身に余る程のお言葉を頂き、素雪会長も「初心忘るべからずの精神で一層の研鑽を積み、会員

皆で向上していくこと」と宣言いたしました。

こうして記念すべき「第一回伊呂波書作展」は、臨書作品・現代詩文書・仮名作品とそれぞれすべての分野に挑戦し、平成2年8月9日より四日間、下北地方では初めてのグループ書道展が開催されました。

その反響は大きく、下北に書の一頁が開かれ注目の的となりました。

その後、三年に一度の書展の開催を實行し、自分の歩んできた道、これから進もうとする道、開拓する道を発表しております。

特に素雪会長は、書家として初めて「イカ墨」を使つての作品を発表し、NHK「おとなの遊び」番組第一回目の放送で注目を浴びました。

いろいろな種類の筆・材料・書風で書くことの挑戦が始まり、手探りで書いてきた書に新たな道が開かれ、会員一人一人の特徴ある作品が生まれていきました。

会員は、会派の違う各ジャンルの顔ぶれとなり、異色団体と思われれますが進む道は皆同じ、お互いに刺激しあえるものもあり、楽しく制作出来ました。

唯、非常に残念なことは、この会の発起人の一人でもあった中村湖芳さん、それに弟の嘿峰と大切な人を病で失い、希望を失いかけてましたが、書友の暖い励ましで何とか乗り切りました。

弟・嘿峰に幾度となく「二人で姉弟展をやろう」と持ちかけられましたが、



会場にて

私も身体的に自信がなく、弟の希望をかなえてやれなかったことが今更のように悔まれます。

平成17年第58回書道芸術院展では、「白雪紅梅賞」を、同じ年の毎日展では「毎日賞」を頂き、これは弟も一緒に筆を運んでくれたのではないかと思っております。

また、素雪会長を始め、社中の暖かなご支援、家族の理解と支えがあつてこそ今も尚、書作に専念出来ることを幸せに思います。

いま、伊呂波書の会は、書道研究会グループとして幅広く、一地域にとどまらず、岩手県・宮城県にまで会員が増えました。

書道界ではなかなかむずかしい書派、会派にとられず、勉強しようとする精神を持ちながら、今後も新しいことに挑戦しながら前進していきたいと思っております。



平成10年伊呂波書の会「十周年記念書作展」高橋嘿峰書 臨書「鐘鼎文」

明月上人と屋代島

林 春 雪

(漢字部・審査会員)

昨年恩地春洋先生をお迎えて、郷里山口県の屋代島で春雪会書展―「詩仙李白、天衣無縫を詠う」―併催「風に誘われて」春雪個展を開催した。生徒を含め会員は書展に足を運ぶ機会も殆どなく、いくら図録で優れた作品の写真を見ても解説を読んでも感動にはなかなか繋がらない現状だ。自分自身で体験し体得すれば、達成した喜びを皆と共有できる筈だ。今日より若い日はないと会員と自分を励ましなが、作品作りに入っていた。しかし当初は引いていた会員も皆で集ううちに徐々に嬉々として楽しみへと移行し李白の詩を通じて漢詩の世界で有意義な時間を共有できた。

折しも、そんな最中我が屋代島生誕の明月上人の資料を見る機会を得た。周防大島町(屋代島)の人口は今約2万人だが江戸末期は7万を越した。明月は越後の良寛、備中の寂厳と並んで近世緬流の三筆と呼ばれている。屋代島は淡路島、小豆島に次いで瀬戸内海



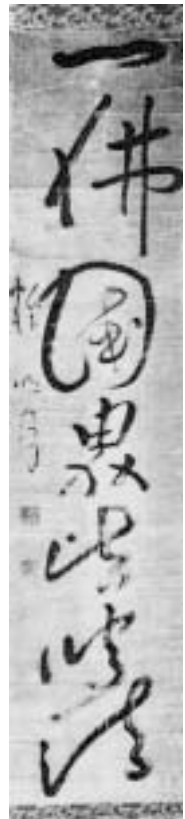
明月上人像

で三番目に大きな島で、風光明媚、氣候温和で自然豊かな島だ。当時瀬戸内海は、都と九州又はるか朝鮮半島を結ぶ航路であった。豊かな生活をしていた島民は、文化を楽しむゆとりもあり、土豪や寺院等を抛り所として風雅を解

する者達が集まっていたという記述が残っている。文化の潤いのある島だったようだ。

明月上人は1779年(今から280年ほど前)8月15日周防大島の日前村、願行寺に三つ子の次男として誕生した。月の美しい中秋であったのにちなみ、後に明月と名のつた。書に強い興味を持った明月は両親の教えで幼い頃から腕を磨いた。本堂の縁にぬれぞうきんで字の稽古に励んだ後に、拭き掃除を始めたという逸話も残る程、書道にひたむきな明月の性格に心打たれる。明月が四国松山市の円光寺に入寺したのは14歳の時だ。住職の義空法師から仏教や儒教の手ほどきを受け京都・大阪・江戸などへ学問修行をした後、33歳で円光寺の七代目の住職になった。51歳の時、寺の仕事を一人息子の徳成にゆずって引退し、一日中書や詩文に熱中して暮らした。頼まれれば額や石碑など気安く引き受けた。又散文作りや書を通じて多くの人と親交を深めた。「扶桑樹伝」や「夷与国温泉記」などの書物も頭わしている。1797年、69歳で亡くなる。

生誕の願行寺を尋ねると明月上人自



明月上人書

筆の「一佛國界皆聞法」の掛け軸が残されている。その字体と同寸でそのまま碑にしたものが、境内に造られている。(写真) 広い世界の人々が一佛に帰依して真理を追求する説法を聞いている姿を詠んだものだという。明月上人の書風の真骨頂は草書体であり、艶麗優美にして脱俗清気に溢れ、変幻自在である。アンバランスの中にバランスを保った美しさを放っている。中村不折先生は「明月上人の書には、ただただ圧倒される」と言っていてよなく愛した。又、横山大観氏も明月上人の書を非常に好み「楹山山深水寂」の一軸を珍重したといわれている。

明月の書が年を経るに従って高く評価されていくのは、明月の人格と書の品格が変遷してやまない幾百年の世代を貫通する力を持っているからに他ならない。現在の自分にはその全てを解せる力がないのが残念だが、日々精進を重ね、地方が生んだ明月の書の良さのいちばんの理解者になりたいものだと思っっている。

いろは歌

藤野桂春

(漢字部・審査会員)

春洋会展のテーマが、「いろは」の一字書になるかもしれない。どんな感じになるか、とにかく書いてみることにした。

かなの優雅さと、余白の美、一字書の強さ、半紙サイズで表現するのは大変である。書きやすい字を選び、筆をかえたり、二本使ってみたり、紙、墨等いろいろ試しても、思うようにならない。

太い所をもっと太く、潤濁の変化を途中考えが浮かんで来るが、集中出来ず、終筆がパチッと決まらない。

「すっと軽く」気分よく書けたらと悩んでしまう。

仕方なく何枚か選んで、松原教室で恩地先生に見ていただく、三枚残されて、「ふ」は深く、「よ」は濁筆がきいて、「く」は線に味があると、過分な評価をいただいて、少しほっとする。

先生は超人的スケジュールの中、どんなにお疲れの時も、私達の書を選ぶ



恩地先生よりご指導いただく

れる時、少しでもいいものをと、真剣に、またある時は楽しそうにされる。あまりこまかい事はいわれないが、いつも誰もが励まされ、安心して次に進む事が出来る。

秋の展覧会にどんな作品が展示されるか、春洋会の一人一人の個性が、ど

のように發揮されるか、とても楽しみだ。

視点をかえて「いろは」について、本で探してみよう。

新潮新書、「日本語の奇跡」

山口謠司氏の著書から次の一節を引用させていただいた。

「いろは歌」は、吉備真備が作ったあるいは空海が作ったという伝説もあるが、明治以来、十世紀の後半というのが通説となっている。ただし、誰が作ったものであるかはよく分かっていない。

色は匂へど 散りぬるを

我が世誰ぞ 常ならむ

有為の奥山 今日越えて

浅き夢見じ 酔ひもせず

「色は匂へど散りぬるを」とあるが、この「匂ふ」は視覚的に映えることを示し、現代語のような嗅覚的な意味ではない。「花の色は鮮やかに映えるけれども、(いずれば)散ってしまうものなの」という意味である。

次の「我が世誰ぞ常ならむ」は、「私の生きているこの世で誰が一定不変であろうか、いや誰も一定不変ではない」。

「有為の奥山今日越えて」は、万物は何らかの原因があってこの世に存在しているという仏教的世界観に基づく。「有為」とは原因があることを示す語だが、ここでは原因があっ

て存在している万物を意味している。万物で満たされたこの世を一日生きることを山を越えることにたとえて、このように表現する。

最後の「浅き夢見じ酔ひもせず」は、「はかない夢など見るまいよ、酔っているわけでもないのに」という意味である。

ここまで読んで、私はすごいと思う。深い意味を持った歌を、すべてのかなを使いながら重複させずに、みごと、快いリズムで作り上げた人に、拍手を送りたい。今まで意味も良くわからないまま、いい加減に読んだり書いたりしたことを反省したい。

作者不詳という事が、私の心をいっそう「ロマン」へかきたてる。

その頃、時は今よりもはるかにゆったりと流れ、人々は心豊かに過していたのかもしれない。

深く静かな時の中で、生まれた歌のような気がする。私は今までも、ずっと「いろは」が好きになった。

あまり小さな事にこだわらず、背のびせず、下手でもいいから素直に、心をこめて書くことにしよう。

久しぶりに大阪にふわっと雪が、つもった日

桂春

〈追記〉

平成20年夏 春洋会書展

「ひらがなの造形」が開催されました。その年の2月に書いたものです。

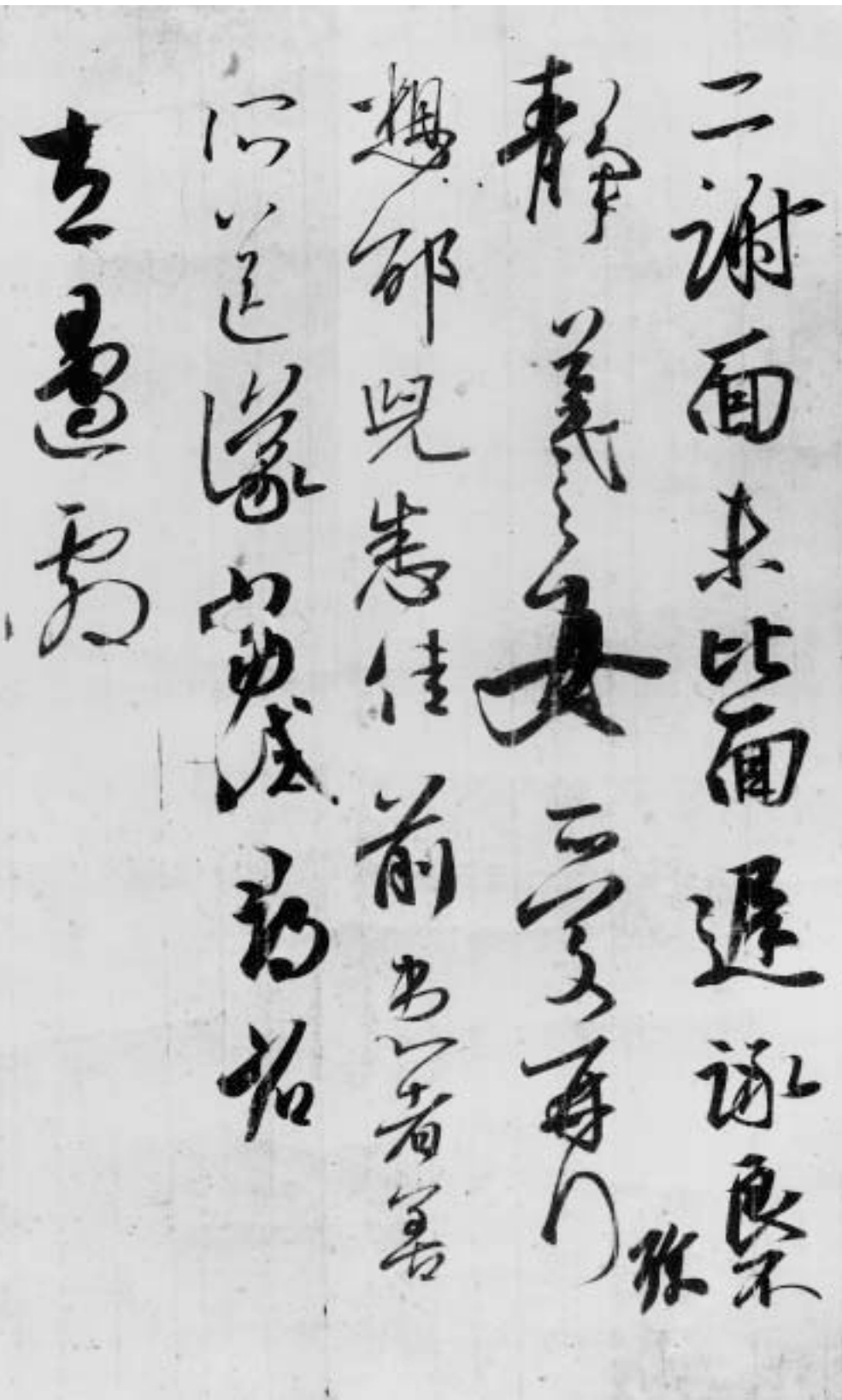
〈解説〉喪乱帖は、実は三通の書翰の総名である。前半の八行が喪乱帖(295)に掲載済み、ついで五行分が「二謝帖」、終四分分を「得示帖」という。双鉤填墨の方法で撮

いたあとまで精巧に再現されている。真蹟は無いと考えられている王羲之の書の真相を知る上で、信頼度の高いものと伝えられている。喪乱帖に関連するものとして、今回は二謝帖を掲載しました。

(編集部)

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から、何文字臨書してもよい。(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
(押印のみ可)



二謝面未。比面遲詠。良不靜。羲之女愛。再拜。「想邵兒悉佳。前患者善。」所送議。當試尋省。「左邊劇。

※図版・2行目右下「珍」 鑑定家・姚懷珍の押署である。

かな研究部

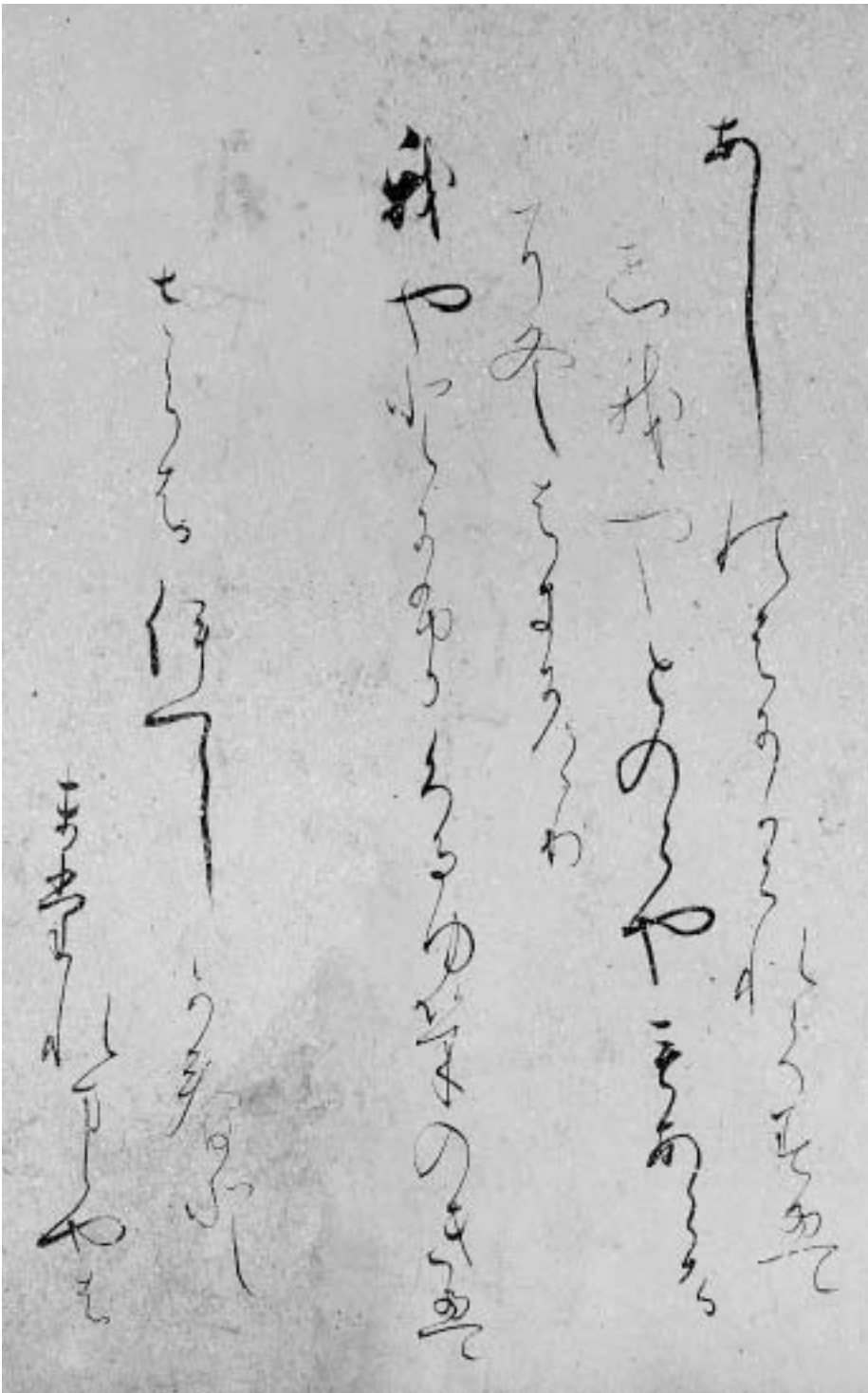
重之集 (伝・藤原行成) ③

〈よみ〉
あし^{能者}のは^{不可久}にかく^毛れて^美みえ^者
し^志我^者や^文どの^介こ^利や^毛も^者あ^者ら^者は^者
に^耳冬^者は^者き^者に^者け^者り

我^登や^尔ど^布に^久ふ^久り^久く^久る^久ゆ^久き^久の^久き^久え^久
ざ^登ら^登ば^登い^登つ^登し^登か^登春^登と^登
ま^登た^登れ^登ま^登し^登や^登は^登

〔解説〕この冬部以降は、行取りや字句の配置も比較的自由な態度で散らし書きをし、仮名書きに手慣れてはいるが、和歌の素養のそれほど高くない人物が想定できる。この伝行成筆本「重之集」は、今日まで調度手本としての姿を伝えてい

ること、また、美しく優美な料紙に奔放でリズムカルな筆致を駆使した書風で書写されること、十二世紀初頭に遡る書写と推定されることなどから、料紙工芸・書道史・美術史において極めて貴重な遺品といえよう。(編集部)



※上記の掲載歌一首以上を書く(全臨も可)

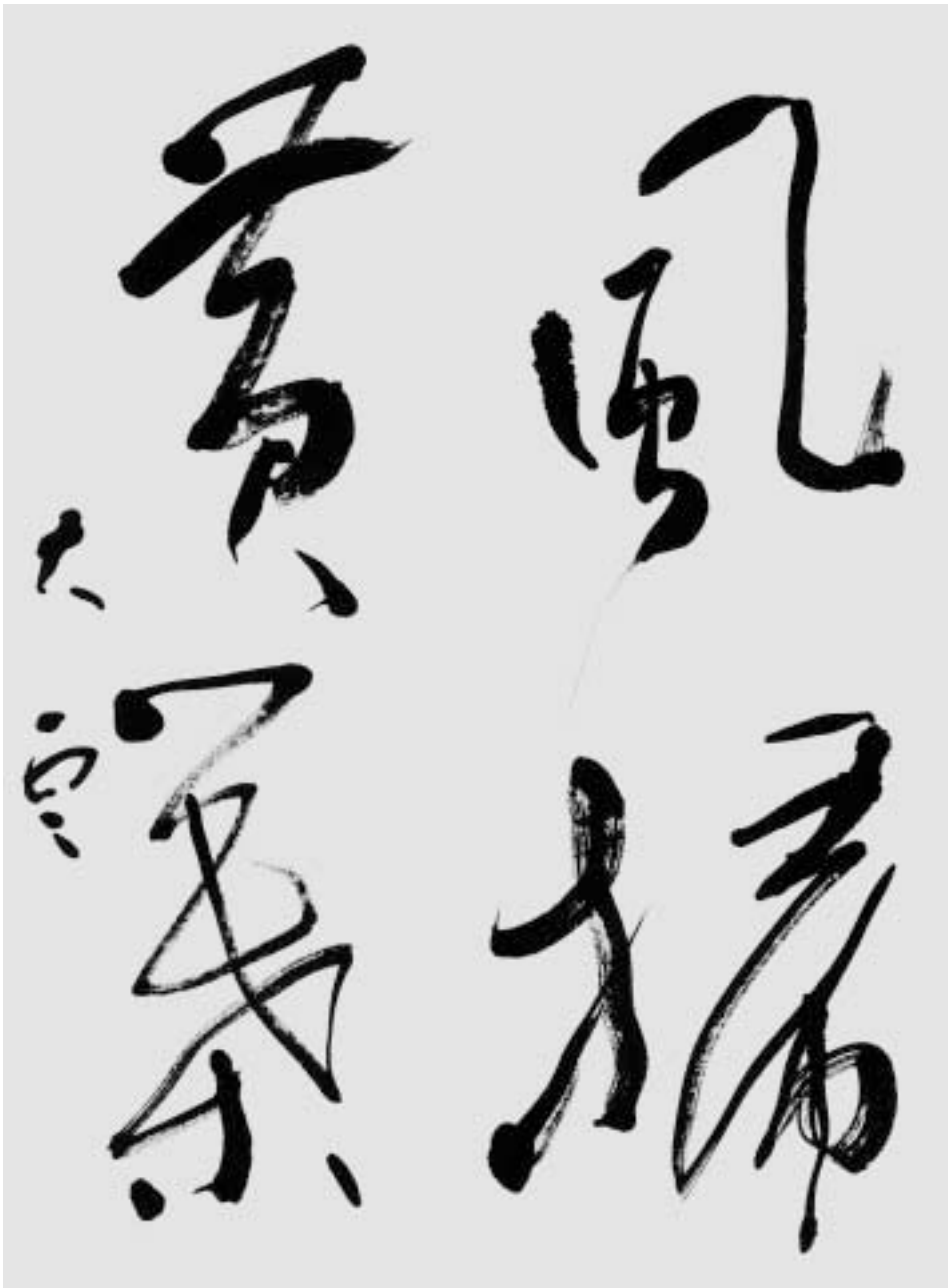
用紙

・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○○臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



風掃黄葉

よみ (風黄葉を掃う)

書体 自由

習い方解説 (三)

辻元大雲

風掃黄葉
(風黄葉を掃う)

喬知之

秋の句より四字句を行草体で表現してみました。暢びやかな筆致をねらい、筆は柔らかい羊毫小長鋒を使用してみました。

創作表現する場合、根底にあるのは普段からの古典臨書の修練です。古今の名跡、古碑帖を常に座右において精習する。自らの血となり肉となるまでくり返し追求しまた、様々な古書体、書風へ挑戦する。学書の基礎、基本はここにあります。今回は唐懷素の千金帖を念頭に参考例を書いてみました。いろいろな古典への挑戦を試みてください。

漢字規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小伏小扇選書



心地開明

よみ (心地開明)

書体 楷書

習い方解説 (三)

小伏小扇

心地開明
(心地開明)

(正法眼蔵)
弁道話

道元の「正法眼蔵」に出てくる
仏教語で、「心地」は心のこと。
大地にたとえた。迷いの霧が晴れ
て悟りが開ける意。

「心」大胆に空間を掴むように。
二点は大きく。

「地」也は土の二倍の面積で浮雲
を強く堂々と書く。

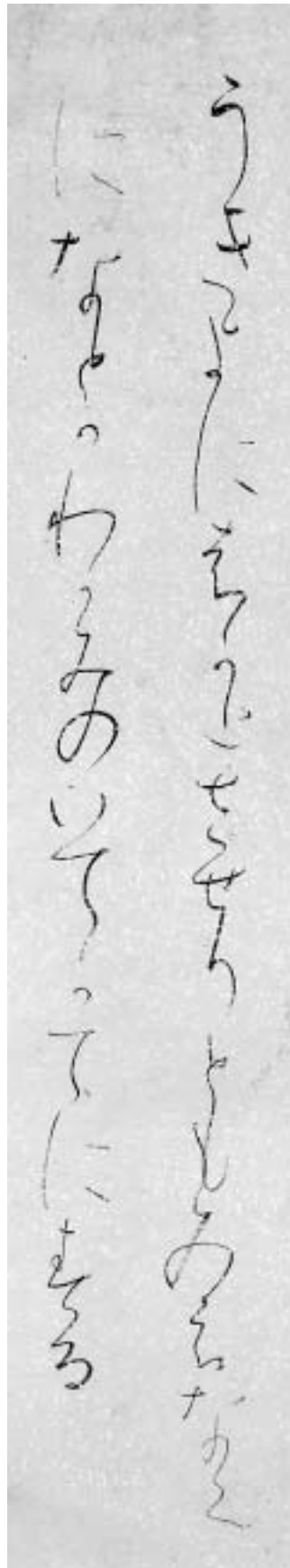
「開」門構えを背勢にとり「开」
は大きく

「明」月が目を抱えるように。特
に終画のたて画は全体を支
えるように強く。

かな条幅規定 秀級以下 【一月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連続)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方

うきよには(者)か(可)どさせりともみえなく(久)
になどか(可)わが(可)みのいでが(可)てにす(春)る

習い方解説 (三)

天海 矩子

初冬^{はつふゆ}や日和^{ひより}になりし京^{きょう}はづれ

(与謝^{よせ}蕪^う村)

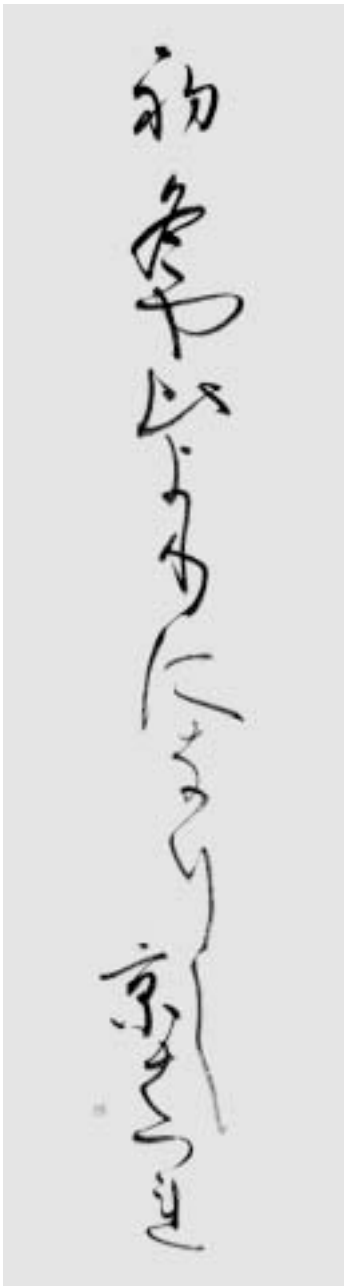
京の郊外で、初冬の晴れた日を嬉しく思う気持ちが伝わってくる。

俳句の場合、和歌より文字数が少ないので、半切たての時は一行書ぎが多い。今回は二行書ぎのようになりました。一行目下部の字に添うように二行目を書くと、おさまりが良くなります。

行が直立しないように、又墨の潤濁にも気を配りましょう。

かな条幅規定 【一月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

天海 矩子 選書



よみ方 初冬^{はつふゆ}やひ(比)より(利)にな(奈)りし京^{きょう}は(者)づれ(連)

創作

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

広瀬舟雲 選書



在天願作比翼鳥 在地願為連理枝
〔天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん〕

書体||自由

習い方解説 (三)

広瀬舟雲

唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲劇的な恋物語である白楽天の詩「長恨歌」の一節です。天上では比翼の鳥、地上では連理の枝となりたいという意で、どちらも夫婦仲の良さを例えています。同字二種類（在・願）をいかに書き分け全体の調和を図るかが今回の課題です。天女の舞う姿をイメージし、仲よく丸く包み込むような書風で揮毫してみました。

漢字条幅規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

横谷尚恵 選書



瑞氣満梅花 (瑞気は梅花に満てり)

書体||自由

習い方解説 (三)

横谷尚恵

「瑞気は梅花に満てり」
一月の出品になりますので「瑞気は禅の心が光り輝く様を、たたえる語」を選びました。新しい年が瑞気に満ちた年でありますように祈ります。

習い方解説 (三)

川島舟錦

千の風に
千の風になろう
あの大きく空を
吹きわたっています
千の風になろう 舟錦書

『作者の考えを整理してみよう。』

一、私は死んだけれど、実は死んだように見えているだけで、本当の意味では死んではいない。

二、ではどうなったのかというと、人間以外の他の存在に生まれ変わったのだ。

作者はつまりそう言いたいのである。』
新井満著『千の風になって』より

漢字、仮名が、よく溶け合うようにある程度のスピードを楽しんでのびやかに書いてみましょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

用紙IIはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体II自由

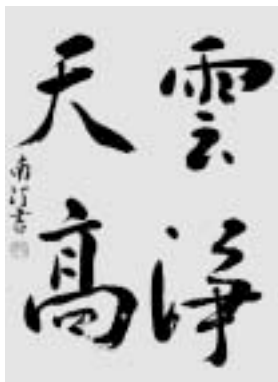
木一平作品
各部総評

NO. 582

漢字部 師範 川本 南汀

箴鋒で沈着冷静な運筆で、濃厚篤実な人柄を思わせて深い味わいがある。この気分を大切にしたい。

◎漢字部総評 書は線質と形によって表現される。線は書者の呼吸によって色々な表情を見せる。線の研究を第一としたい。(春洋評)



漢字条幅部 師範 加藤 紫翠

濃墨による潤濁の変化、柔毫筆による滑らかな筆致が自然なリズムを醸し出し、爽やかな作。

◎漢字条幅部総評 上級者参考例の隷書表現が多かったが、基本的な用筆が備ってない作多し。下級も含め基礎技術の練磨を。(天露評)



現代詩文書部 特選 今関 心華

鶏毛筆を使っただけの作品と見るが、適度な墨量で線質の力強さ、リズムカルな運筆は益々線が冴える。

◎現代詩文書部総評 現代詩文と云えども線質が大切です。古典の臨書で力をつけましょう。(墨光評)

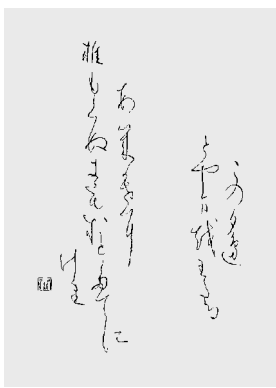


かな条幅部 三段 井川 皓蒼

参考手本をよく理解して書き上げた秀作。大字表現に必要な動きや気字の大きさが見られ頼もしい。

かな部 師範 東平 絹子
穏やかで無理のないタッチが美しく、かなの大切な要素が総て備わった快作です。雅印は小さめに。

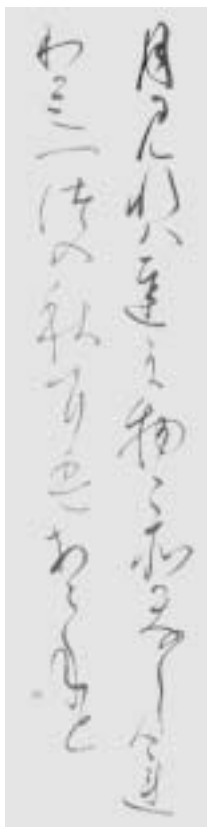
◎かな部総評 字の小さい作多く残念。創作が少なく惜しまれるが、手本の一字の置きかえから始め、独自の文字、布置へ。(明子評)



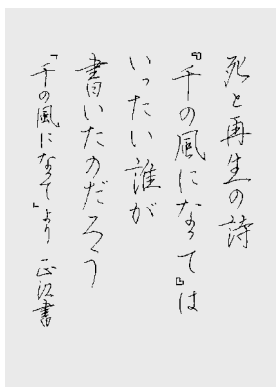
ペン字部 師範 有田 正江

行書の流れをよく表現し、しかも流れすぎずしっかりと地に足をつけた書き方見事、秀作である。

◎ペン字部総評 ややもすると流れすぎ字形のくずれている作もあった。行書は楷書の形をふまえて流れを作ることが大切。(蒼玄評)



◎かな条幅部総評 書きやすい手本のため誤字は少なかったが、リズムに乗った表現を心掛けたい。兎に角書き込むこと。(洋子評)



死と再生の詩

千の風になつては
いたい誰が
書いたのだらう
千の風になつてより 正江書

特別研究部
優秀作品(特選)

篆刻

(大雲)

佐藤希雲

「七言二句」



6 × 6 cm

佐藤希雲刻

◆刀の切れ味が変ってきました。線質の一部に違いのあるのは、篆書の学習でしようか、刀法の学習でしようか? 考えてみて下さい。(春洋評)

◆七言二句十四字をバランスよく布字し、冴えた刀意が明快である。やや切れすぎの感あり、鈍刀の味わいも欲しい。器用すぎないよう。(大雲評)

◆切れ味鋭く冴え冴えとした韻致。多字数の朱白のバランスも美しい。縁の扱い、特に下側の部分の間が少々気になりますが、意図的か。(洋子評)

◆暖かい線の表現、ゆったりとした雰囲気を感じさせてくれる。欲をいうと作品にある落款のように回りの朱が強過ぎるので少し削るのは。(倫子評)

かな

(卯月) 栗原信子

「ゆふだちの」

◆上部と下部に大胆に散らし、構成の妙を見せる。骨力ある線の強さが技術の高さを物語る。もう少し拮がりある呼吸、字形の工夫を。(大雲評)

◆線の強さが響きを高くし、品格も備わっているが、やや表情に硬さが残る。かなとしては難しい問題ではあるが、どこかに解れる部分を。(洋子評)

◆落ちつきのある筆の運びゆつたりとして観賞者には心のやすらぎが生れるのでは。もう少し欲をいうと激しく移る大きな動きが欲しい。(倫子評)

◆豊かで、おおらかな線質と字形で正攻法の姿とみました。書き出しから終筆までの心の変化をもう少し出してよいかと思いました。(春洋評)



栗原信子書
180×60cm

総評

NHKスペシャルで、数学の難問とされ多くの天才的数学者を悩ませたポアンカレ予想についてのドキュメント番組があった。私たちにとって数学はただ計算をするだけのものだが、数学者にとっては果てしなく広がる宇宙も顕微鏡でもみえないミクロ以下の世界も、数によって想像が出来ることに感動を覚えたが、私たちは「書」によって何を頭の中に描けるのだろうか。

未だ見たことのないものを作り出すには想像力が鍵となる。大変なことではあるが完成した時の喜びは大きい。人間の頭の中にある宇宙は一番広大で深いかもしれない。

今回は86点(漢26、か11、現26、前21、篆2)新しい作品の発表を期待する。(蒼玄)

〈特選候補者〉	
漢	墨宣 狩野 廣洲 現 千葉 佐藤 萊扇
現	墨宣 梅道 誠和 石崎 甘雨
漢	大雲 長島 櫻雨 陽陽 岩崎 陽光
漢	惠雅 板橋 雅邦 篆 青蓮 中山 無硯
漢	玄穹 千葉 紅雪 前 墨宣 大町 菜円
漢	か 卯月 前田まさ美 四谷 角田 悠香
漢	翠柳 岩崎 竹溪 湘南 佐藤 詠子
漢	加藤 紫翠

前衛書 (千葉) 渡辺秋湖



渡辺秋湖書
176×55cm

「飛来」

◆流れを美しく表現され大きな紙に力一杯、抑揚に富み筆の動きを感じさせてくれる。白も上手に生かしているが印の場所に一考を。

(倫子評)

◆伸びやかで大らか、何よりも明るいのがよい。複雑すぎる作品が多い中で、ゆったりとした心の動きが垣間見え、規模も豊か。今後に期待！

(洋子評)

◆柔らかな雰囲気、淡墨を効果的に生かし、流れるリズムを破筆で表現して妙。やや軽すぎる感あり、特に下部の浮薄さが気になる。更に挑戦を。

(大雲評)

◆墨の力もありますがデッサンのようでやや軽すぎる感もしますが明るく爽やかな出来です。筆先は利いていますが線の力もう少し欲しいね。

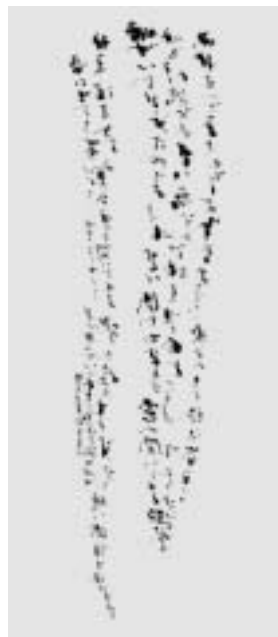
(春洋評)

現代詩文書

(游水)

荒川空華

「銀色夏生の詩」



荒川空華書

136×60cm

◆詩を読むのでなく口ずさむようなリズムが紙面から湧き出ている。そのリズムが上手に形造ってゆき、読み終って見ると全体ピタッとマッチ。

(倫子評)

◆この感性と構成見事、余白の白が輝いて見えます。あえて気になるといえば墨色、この宿墨のにじみにごりは表具しても大丈夫だろうか。

(春洋評)

◆ねっとりとした濃墨は独特の潤濁の変化を見せ、リズムカルな運筆から自然な行の傾き、大小の変化は絶妙のバランスを見せて妙。

(大雲評)

◆まず、墨の扱いに注目。宿墨を乾いた風情に熟し、構成の新鮮さで一際目を引く。行の傾斜が呼吸に寄り添うようにバランスして白眉。

(洋子評)

漢字 (大雲)

大隅晃弘



172×55cm

大隅晃弘書

「石牀」

◆突き込むような筆圧が、墨のにじみに力を与え沈潜して力として訴えてくる。堂々たる風格の書です。最後の「山」の横画気になった。

(春洋評)

◆たっぷり豊かな筆致が存在感ある表情を醸し出し、堂々たる作。落款印やや大きすぎるが自刻とみた。刀意鋭く快作。更に努力を期待。

(大雲評)

◆堂に入った書きぶり、沈潜した呼吸が周りを包み込むような暖かさを出す。終筆の処理に巧みさを見せ逸格。印が少々立派すぎました。

(洋子評)

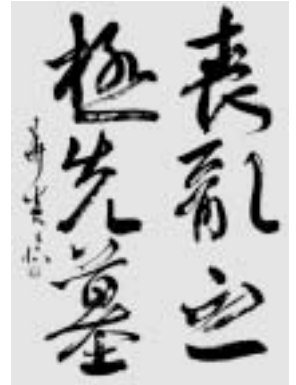
◆体の動きが筆にのり移ったような活躍ぶり。墨の流れも淀みなく息が続いている落款は自刻と伺ったが、作品によく合っている。

(倫子評)

漢字研究部
(喪乱帖)

選評 西林 乘 宣

今月のホープ作品



佐藤 華 炎

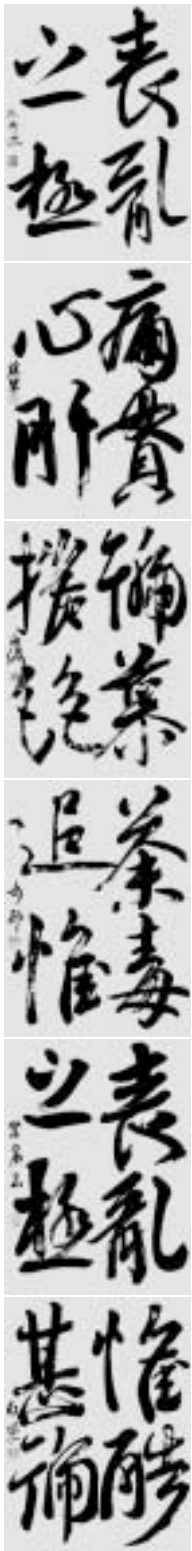
漢字研究部 特選 佐藤 華炎

6文字を落ち着いた筆致で格調高くまとめ
まさに絶品、審査中、終始頭から離れなかつ
た。惜しむらくは、本誌購読者に実物を観て
いただけぬことである。写真版になると人
の顔でも景色でも立体感が失せてしまう。

◎漢字研究部総評

今回見せていただいた作品は全部で133
2点、それにしても上位から下位までという

と、随分とひらきがある。何回出品しても選
外になる方へ①課題が行書なので、半紙の
上を筆が滑るがごとく②全体に太めすなわち
ボリュームを出す。競書は文字どおり競争、
そろりそろりと書いていたのではおいていか
れる③墨の光沢を出す。発色しないくすんだ
作品は不可④半紙は上質のものを使う⑤羊毛
を駆使して手本の特徴をオーバーに表現する。



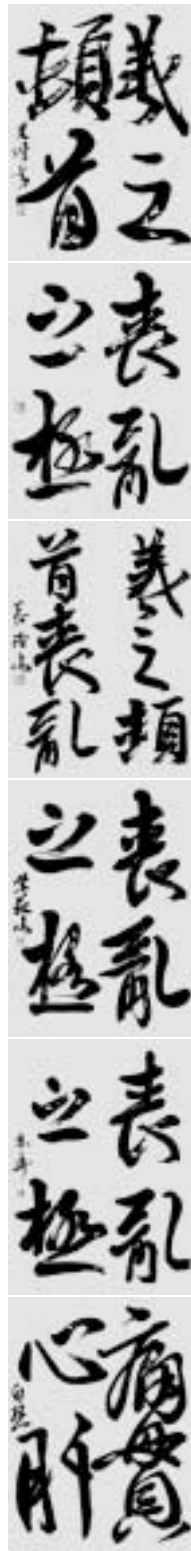
白紫妙白瑤炎
景泉邨涛翠秀



雅紫翠美昌翠
邦翠綾子子江



聡志翠郁谷青
苑朋葉子恵山

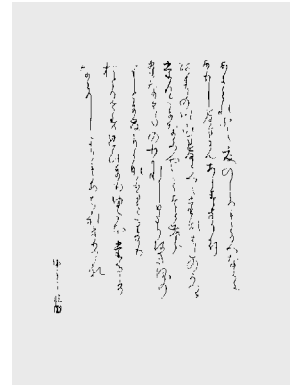


白朱紫谷恵光
慧華苑玲泉燁

かな研究部
(重之集)

選評 朝倉春江

今月のホープ作品



吉田 佑子

太く重々しい線と、風に吹かれて糸が舞うような軽快な線とがうまく流れに乗って、速筆ならではの美しさが発揮された秀れた作品となりました。

◎かな研究部総評

流麗で繊細な筆致、優雅な古典を丹念に書くことによって字形の妙、墨量、連綿の移行、躍動など自己表現の方法をもっと高度に鍛練していきましょう。

かな研究部 特選 吉田 佑子



彩正昭
雨子二

谷み益
恵よ江

悟紅彩
子雅香

嵐良炎
泉泉秀

かな研究部成績表

京竹山吉田	電電新山	蓮小後谷	五遊川	本本本	東東東	岩岩岩	英英英	ももも	正正正	龍龍龍	書書書	五五五	白白白	龍龍龍	長長長	秀秀秀	英英英	秀秀秀	龍龍龍	電電電	千千千	八八八	ハハハ	〃〃〃
橋村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子	村佑子
大島高石	小高石	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美
大島高石	小高石	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美	近藤美